



高丘親王航海記

高丘親王航海記

一九八七年十月二十五日 第一刷
一九八八年二月十日 第五刷

定 価 一八〇〇円

著 者 澁 澤 龍 彦

発行者 西 永 達 夫

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話代表(〇三三)二六五一二二一

本文印刷 大 日 本 印 刷

製 函 ト ー シ キ

製 本 中 島 製 本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

© Ryuko Shibusawa

Printed in Japan

ISBN4-16-309840-2

目次

頻	真	鏡	蜜	獮	蘭	儒
伽	珠	湖	人	園	房	良
199	167	133	101	71	39	5

装帧——菊地信義
地图——著者作成

高丘親王航海記

儒
艮

唐の咸通六年、日本の暦でいえば貞観七年乙酉の正月二十七日、高丘親王は広州から船で天竺へ向った。ときに六十七歳。したがるものは安展に円覚、いずれも唐土にあって、つねに親王の側近に侍していた日本の僧である。

唐代になって安南都護府がそこに置かれ、アラビア人からルーキンと呼ばれていた交州（今日のハノイ）とならんで、そのころ、この広州は南海貿易のもつとも殷賑をきわめた港であった。古く漢代に番禺ばんぐと呼ばれていたころから、この港には犀角、象牙、瑇瑁たいまい、珠璣しゆま、翡翠、琥珀、沈香、銀、銅、果布が多くあつまり、それらは唐商によって中原に積み出されていたという。その活気はげんに咸通の今日にいたってもおとろえず、遠くアフリカからアジアまでを股にかけて交易しているアラビアの船はもとより、天竺、師子国（セイロン）、ペルシアの船、それに崑崙船こんろんせんと呼ばれる南方諸国の船までが江上に舳ふたばたを接して、それぞれ甲板に肌の色も目の色もちがった、潮焼けした半裸の船子たちを右往左往させているさまは、さながら人種の見本市を見るかのよう

である。マルコ・ポーロやオデリコがこのあたりの海を通過するのはほぼ四百年ないし四百五十年後のことだが、すでに白蛮（ヨーロッパ人）のすがたさえ、あちこちの船上にちらほらしている。そうした毛色の変わった人間のうろろするさまを見ているだけでも、この広州の港のたたずまいはおもしろかった。

おおよその計画としては、親王の一行は小さな船に身を託して、この港から広州通海夷道と称する航路を南西に向つてすすみ、安南都護府のある交州で上陸して、安南通天竺道と称する陸路から天竺入りする予定だった。安南通天竺道は交州を起点として二路に分れ、一つは安南山脈を越えて扶南（シヤム）方面へ出る道、もう一つは北方の峻険たる雲南の昆明、大理をへて驃（ピルマ）にいたる道である。どちらの道をえらぶか、まだこの段階では決めていなかった。場合によつては海路をえらび、大陸の沿岸づたいに占城（ベトナム）、真臘（カンボジア）、盤盤（マライ半島中部）と過ぎ、羅越（シンガポール付近）の岬を迂回してマラッカ海峡からインド洋に出るといふ手も考えられなかつた。しかし実際のところ、海であれ陸であれ、どんな不測の危険が待伏せしているかもしれぬ未知の領域であつてみれば、そんな計画的な旅はとても望めそうになく、さしあたっては運を風にまかせて、とにかく行けるところまで船を南にすすめることよりほかに考える必要もなさそうであつた。

赤道に近い緯度だから、季節は一月の厳冬でも気温はさほど寒くない。風はむしろ生ぬるいくらいである。親王は舷に立つて、背すじをまっすぐにのばし、両手を勾欄にかけて港の喧騒を眺

めていた。とうに本卦がえりしているのに、どう踏んでも五十代の半ば以上には見えず、親王の背すじはいつもすくよかにびんとびていた。すでに船は準備をととのえて、船長の合図さえあればいつでも出航できる状態になっていた。そのとき、波止場の人群れをどなりながら荷をはこんでいた仲仕たちの足のあいだをすり抜けるようにして、岸壁から親王の船へ小ばしりに駆けこんできた少年があったので、親王はいぶかしげに、かたわらの安展と目を見合わせた。親王と同じ僧形ながら、安展は四十がらみの眼光するどい屈強な男である。

「いよいよ出発というぎりぎりの土壇場に、これはまた、おかしなやつが舞いこんできたぞ。」
「わたしが見てまいりましょう。」

やがて安展に引きずられて親王の前につれてこられたのは、頬のつやつやした、女の子みたくに手足のきゃしゃな、まだ子どもっぽい十五ばかりの少年だった。見かけによらず語学が達者で、つねづね親王の通訳をつとめている安展が、当地のことばで少年を問いただと、息せき切って少年の答えるには、自分はひそかに主家を逃げ出してきた奴隷なので、追手に見つかれば殺されるにきまつているゆえ、どうかしばらく船の中にかくまってほしい。もし船がこれからどこかへ出帆するのならば、船といっしょにどここの外国へつれて行かれたとしても自分には少しも悔いるところはない。いや、それよりも船の中で浚みであれ何であれ、せめて自分のできる仕事をやらせてもらえらるならば、こんなありがたいことはないという切々たる訴えであった。

親王は安展をかえりみて、

「かわいらしい窮鳥がふところに飛びこんできたものではないか。追い立てるわけにはいくまい。つれて行ってやろう。」

安展は気づかわしげに、

「足手まといにならなければよいが。しかしまあ、みこがおつれになりたいとおぼしめすなら、おつれになるがよろしいでしょう。わたしはどっちでもいい。」

そこへ円覚もやってきて、

「天竺への渡海をひかえて、まさかにもごいこともできますまい。これはひよつとすると仏縁かもしれない。みこ、つれて行ってやりましょう。」

三人の意見がどうやら一致したとき、鱸から船長の声がひとときわ高く、

「纜ともしな解とけえ。面舵おもむきいっば……」

ゆるゆると江心にすべり出した船から岸壁を見ると、いましも少年を追ってきたらしい男どもが二三人、疑わしげな目つきで遠ざかってゆく船を見やりつつ、口々になにか叫んでいる。間一髪のところで一命をとりとめた少年は嬉しさのあまり、親王の足もとに身を投げて涙にむせん。親王は少年の手をとって、

「おまえは秋丸という名をなのるがよい。つい先年まで、わたしの身辺の世話をしてくれる役目の文部秋丸はつつかべというものがいたが、このもの、長安で疫病えんやみを病んであえなくなった。おまえは秋丸の二世になったつもりで、わたしに仕えてくれ。」

こうして高丘親王の渡天に扈從するものは安展、円覚、秋丸の三人になった。ここで円覚という僧について述べておけば、このものは安展よりもさらに五歳ほど若く、ひそかに唐土にあって練丹術や本草学をまなんだ俊秀であった。その日本人ばなれしたエンサイクロペディックな学識には、親王もつねづね一目を置いていたほどの人物である。

船は広州の港を出ると、はるかに雷州半島と海南島をめざして、大海原にぼつんと浮かんだ一枚の木の葉のごとく、気まぐれな風にながされるままに船脚をはやめたりゆるめたりした。灼熱の南海はときに量気をこめて油のように風ぎ、船はすすんでいるのか同じ場所にいづまでも漂っているのか、それさえ分らぬような苛立たしい幻覚をもたらすことがあった。そうかと思うと、いまにも帆柱が風にへし折られるかと心配になるほど、波をかきたてて水面を飛ぶように快調に突っぱしらされることもあった。まるで水の質量が時に応じて変化するかのようである。南海の風と水にはふしぎな性質があつて、そこを航行する船に、まったく予想もつかないような物理的作用をおよぼすのではないかと思われるばかりだった。毎日、きまつたようにはげしいスコールが降つたが、そのたびに視界はすべて暗澹たる灰色になり、天と水とが渺々とつらなつたようになつて、どっちが上だか下だかまるで分らなくなつてしまふ。自分の乗っている船がさかさまになつて、茫々と泡だつ天をはしっているのかと目を疑うようなこともある。親王、その海のあやかしにつくづく感じ入つて、

「これだけ極端に南へ下れば、日本の近海ではとても信じられないような、世界の上下が逆転す

るといふようなこともありうるのかもしれない。いや、しかし、まだまだこんなことにおどろいたりしてはだめだぞ。これからさらに天竺へ近づけば、おそらく、もつともつと奇妙なことがおこることを覚悟しなければなるまいからな。それこそ、おれの望んだことではなかつたらうか。見ろ、天竺は近くなつたぞ。喜べ、天竺はもうすぐおれの手のうちだぞ。」

小さな船の舳先に立つて水しぶきを浴びながら、親王はだれにいうともなく、こんなことを闇に向つて吐きちらしていた。吐きちらされたことはたちまち風に吹きとばされて、物質のうに切れ切れに海の上をころがって行つた。

親王がはじめて天竺ということばを耳にして、総身のしびれるような陶醉を味つたのは、まだほんの七つか八つのころだつた。天竺、この媚薬のようなことばを夜ごとに親王の耳に吹きこんだのは、ほかでもない、親王の父平城帝の寵姫であつた藤原薬子くす子である。

すでに平城帝が安殿太子あいでと呼ばれていたころから、薬子はその娘とともに東宮に宣旨まじとして出入りするようになって、若い太子のころをしっかりとつかんでいたので、やがて太子が平城帝として即位するや、れっきとした人妻であるにもかかわらず、その帝への密着ぶりはますますあからさまになつた。薬子にとつて得意の絶頂ともいふべき一時期で、このころ、薬子は宮中と別邸のあいだを急がしく往復するようにして、帝と枕を交わす夜をかさねていた。世間は薬子が帝

を籠絡していると難じたが、スキヤンダルに動揺するような薬子ではなかった。三十二歳の男ざかりであつた帝に対して、薬子の年はいくつであつたか、これはだれにも分らない。そもそもは自分の長女を太子のために入宮させるつもりだつたので、年ごろの娘がある以上、帝よりも年上であつたことはほぼ確実であろう。しかし薬子には年齢がないかのごとくで、旧にかかわらず、あやしいまでに艶なる容色をいまに保っている。それには仔細があつて、薬子はその名の示すように、唐わたりの薬物学や房中術にすこぶる蘊蓄があり、ひそかに丹をのんで若がえりの秘法を行つてゐるのではないかというもつぱらの噂であつた。

薬子とは、本来は一般名詞で、宮中における毒味役の側近のことを意味したらしい。それが個人の名前になつたところに、おそらくは薬子の薬子たる所以があつたのであろう。そういえば古代の本草学の書『大同類聚方』百巻が編纂されたのも平城帝の時代であつた。意外に知られていないが、この時代の権力争いに薬物学や毒物学がいかに必要とされたかを考えてみるべきだろう。薬子とは、いわばこの時代の象徴的な名前だつたはずだ。

平城帝はそのころ八歳の高丘親王をいたく愛していたから、なにかというとき小さなわが子を薬子とともに物見遊山につれ出したり、宮中や別邸での宴席にはべらせたりした。母には内緒で、親王はよく薬子の別邸につれて行かれたし、そこに父とともに泊ることもしばしばだつた。薬子は子どもに対して決してべたべたした愛想のよさを示したりはしなかつたが、秘密をわかち合うもの同士のような、共犯者めいた一種の率直さと親密さで、子どものころを自分のほうへ引き

寄せることには先天的に長じていて、すぐに親王と仲よくなった。たまたま帝が政務の都合なにかで空闈に眠らねばならないようなとき、薬子はすすんで子どもに添寝をしてやるまでになった。添寝してもらいながら聞く薬子の物語に、子どもは幼い夢をふくらませた。

「日本の海の向うにある国はどここの国でしょう、みこ、お答えになれますか。」

「高麗。」

「そう、それでは高麗の向うにある国は。」

「唐土。」

「そう、唐土は震旦ともいうのよ。その向うは。」

「知りませぬ。」

「もう御存じないの。それはね、ずっと遠いところにある天竺という国よ。」

「天竺。」

「そう、お釈迦さまのお生れになった国よ。天竺にはね、わたしたちの見たこともないような鳥けものが野山を跳ねまわり、めずらしい草木や花が庭をいろどっているのよ。そして空には天人が飛んでいるのよ。そればかりではないわ。天竺では、なにもかもがわたしたちの世界とは正反対なの。わたしたちの昼は天竺の夜。わたしたちの夏は天竺の冬。わたしたちの上は天竺の下。わたしたちの男は天竺の女。天竺の河は水源に向ってながれ、天竺の山は大きな穴みたいにへこんでいるの。まあ、どうでしょう、みこ、そんなおかしな世界が御想像になれました。」